

桔梗(ききょう)の花は、人々に盆の訪れを知らせる。三陸地方の話だ。万葉集にも歌われた桔梗は秋の七草で、山野の日当たりのよい場所に育つ。山間の村々、新しき仏のある家々は、紅白の旗を高く掲げ、その魂を招くという。

かつて老人を捨てた地といわれるデンデラ野は、一方で、魂の通り道でもある。「永住の地を去らんとする者と、かりそめに入り込みたる旅人と、またかの悠々たる霊山とを黄昏は徐(おもむろ)に來たりて包容し尽くしたり」と『遠野物語』の作者、柳田国男は書いた。

夏、一日の調査準備を終え、猿ヶ石川を見下ろす高台から、なすすむ夕暮れを見ていると、早稲まさ



やまもと たろう  
山本 太郎

遠野から仙人峠をこえた海沿いの町々では、今年、多くの魂が永住の地を去った。8月はその魂が故郷へ帰る月でもある。震災から5カ月を迎える8月11日、大槌城址(じょうし)へ上がった。眼下には、かつてそこにあつたはずの町が広がっていた。5カ月前、雪に覆われていた瓦礫(がれき)は、その多くが撤去され、平らな土地が広がり、夏の日差しが照りつける。

足音に気づいたのか「どこから来た」と訊(き)く。「漁(い)は?」と訊くと、しばらくして答えが返ってきた。「廃業(はいぎや)だ」。そのまま、男は目を閉じた。もう話すことはないという合図に違(ちが)いない。

男を後に歩く。「避難所にいた方々はすべて仮設住宅への移動を終え、本日、すべての避難所を閉鎖(せいさ)することになりました」というアナウンスが聞こえる。

14時46分、青い空の下、黙(もく)禱(とう) (もくとう)の合図となるサイレンが鳴り渡(わた)った。黙(もく)禱(とう)をささげる。そのとき、一瞬、一陣の風が通り抜けた。今年初盆を迎える魂が帰ってくる。

(長崎大熱帯医学研究所教授)

海の盆  
山の盆

に熟し、山は淡く霞(かすみ)む。ところどころに紅白の旗が見える。柳田が書いた世界が眼前に広がる。

津波で破壊された町の漁港の跡には、男が、わずかに残った鉄柱に背をもたせ、目をつぶっている。